

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平9-258803

(43)公開日 平成9年(1997)10月3日

(51)Int.Cl. ⁶	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
G 0 5 B 13/02			G 0 5 B 13/02	J
A 6 1 J 3/00	3 1 0		A 6 1 J 3/00	3 1 0 Z
G 0 6 F 19/00			G 0 6 F 15/42	M

審査請求 有 請求項の数6 O L (全 9 頁)

(21)出願番号 特願平8-64170

(22)出願日 平成8年(1996)3月21日

(71)出願人 596038951

健祥堂製薬株式会社

東京都渋谷区恵比寿西1丁目10番11号

(72)発明者 丸谷 隆文

東京都渋谷区恵比寿西1丁目16番12号 や

まと健祥堂株式会社内

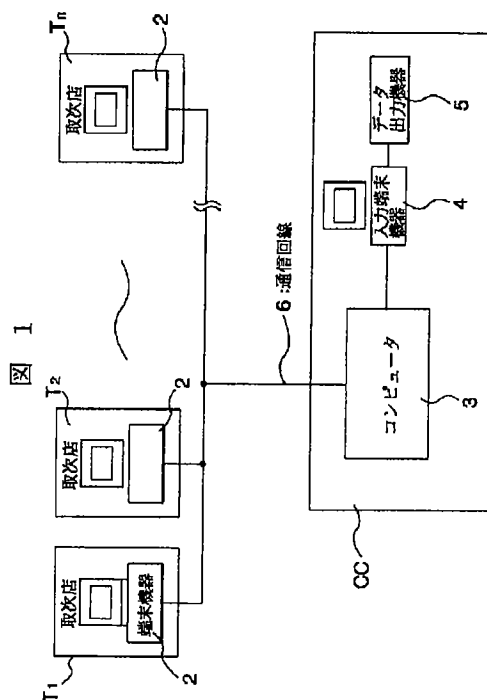
(74)代理人 弁理士 筒井 大和 (外3名)

(54)【発明の名称】 漢方薬処方支援方法およびシステム

(57)【要約】

【課題】 生薬の在庫や調剤機材などを不要とし、深い専門知識がなくても安定した品質の漢方薬を調剤する。

【解決手段】 患者が訪れると薬剤師は、取次店T1～Tnに設けられている端末機器2によりコンピュータ3とアクセスし、所定のフォーマットに従って患者に一般症状、主要症状の問診および舌診を行い、その結果や患者の薬歴などのカルテデータを入力する。ホストコンピュータは、方剤データ格納部に格納された生薬効能データ、方剤データおよびカルテデータに基づいて症状結果データと複数の方剤候補を示す方剤リストとの生成を行い、調剤センタCCの薬剤師が、その方剤リストに基づいて生薬の処方を行い、梱包されて取次店T1～Tnまたは患者の所在地に発送する。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 所定のフォーマットに従って患者のカルテデータを入力する工程と、入力された前記カルテデータに基づいて患者の病状に有効な生薬を選択する工程と、選択された生薬の方剤リストを生成する工程と、生成された前記方剤リストを出力する工程とを有することを特徴とする漢方薬処方支援方法。

【請求項2】 請求項1記載の漢方薬処方支援方法において、生成された前記方剤リストが薬局製剤であるか否かを判断する工程と、前記方剤リストの処方が薬局製剤以外であると判断されると、前記薬局製剤以外の方剤リストの処方と類似した薬局製剤の方剤リストを生成する工程とを有することを特徴とする漢方薬処方支援方法。

【請求項3】 請求項1または2記載の漢方薬処方支援方法において、生成された前記方剤リストの生薬と患者が服用中の薬との照合を行い、副作用の恐れがある生薬を検出する工程と、検出された生薬を含む方剤を警告する工程とを有することを特徴とする漢方薬処方支援方法。

【請求項4】 複数の特定の取次店に設けられ、各患者別のカルテデータを登録、更新または参照する複数のデータ入出力手段と、
処方の支援を行う処方支援データが格納された第1の記憶部と、前記データ入出力手段から入力されたカルテデータならびに前記第1の記憶部に格納された処方支援データに基づいて患者の病状に有効な生薬リストを生成する第1の演算処理部と、前記第1の演算処理部により生成された生薬リストならびに前記第1の記憶部に格納された処方支援データに基づいて方剤リストを生成する第2の演算処理部と、前記第2の演算処理部によって生成された方剤リストならびに前記データ入出力手段から入力されたカルテデータを格納する第2の記憶部とにより構成され、前記複数のデータ入出力手段とオンライン接続された処理手段と、
前記処理手段により生成された方剤リストを表示または出力する出力手段とよりなることを特徴とする漢方薬処方支援システム。

【請求項5】 請求項4記載の漢方薬処方支援システムにおいて、前記処理手段に、薬局製剤データが格納された第3の記憶部と、前記第3の記憶部に格納された薬局製剤データに基づいて、前記第2の演算処理部により生成された前記方剤リストが薬局製剤であるか否かを判断する第3の演算処理部と、前記第3の演算処理部によって薬局製剤以外と判断された前記方剤リストを、前記第1の記憶部に格納された処方支援データに基づいて前記薬局製剤以外の方剤リストの処方と類似した薬局製剤の方剤リストに生成する第4の演算処理部とを設けたことを特徴とする漢方薬処方支援システム。

【請求項6】 請求項4または5記載の漢方薬処方支援システムにおいて、前記処理手段に、生薬と副作用のあ

る薬を検出する調剤忌避データが格納された第4の記憶部と、前記第4の記憶部に格納された調剤忌避データに基づいて生成された前記方剤リストの生薬と患者が服用中の薬との照合を行い、副作用の恐れがある生薬を検出する第5の演算処理部とを設けたことを特徴とする漢方薬処方支援システム。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、漢方薬処方支援方法およびシステムに関し、特に、漢方薬の方剤に適用して有効な技術に関するものである。

【0002】

【従来の技術】薬局や薬店などの漢方薬を取り扱っている取次店では、問診や患者の舌の具合をみる、いわゆる舌診などを行った後、各々の取次店でその患者の症状に見合った生薬を調剤していることは広く知られている。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】ところが、上記のような漢方薬の取り扱いでは、次のような問題点があることが本発明者により見い出された。

【0004】すなわち、各々の取次店で漢方薬の調剤が行われているので、様々な漢方薬の在庫が必要であり、それらの漢方薬を調剤する調剤機材も必要となってしまう、在庫コストや調剤機材のコストなどが高くなり負担となってしまうという問題がある。

【0005】また、漢方薬の調剤は、専門的な知識が必要であり、調剤を行う作業者の知識や経験などによって調剤のばらつきが生じてしまい、それぞれの取次店で品質が安定せず、効果に差が生じてしまうという恐れもある。

【0006】本発明の目的は、生薬の在庫や調剤機材などを不要とし、深い専門知識がなくても安定した品質の漢方薬を調剤することのできる漢方薬処方支援方法およびシステムを提供することにある。

【0007】本発明の前記ならびにその他の目的と新規な特徴は、本明細書の記述および添付図面から明らかになるであろう。

【0008】

【課題を解決するための手段】本願において開示される発明のうち、代表的なものの概要を簡単に説明すれば、以下のとおりである。

【0009】すなわち、本発明の漢方薬処方支援方法は、所定のフォーマットに従って患者のカルテデータを入力する工程と、入力された該カルテデータに基づいて患者の病状に有効な生薬を選択する工程と、選択された生薬の方剤リストを生成する工程と、生成された方剤リストを出力する工程とを有するものである。

【0010】それにより、所定のフォーマットに従って患者のカルテデータを入力するだけで、その患者の症状に最適な方剤リストを生成することができる。

【0011】また、本発明の漢方薬処方支援方法は、生成された前記方剤リストが薬局製剤であるか否かを判断する工程と、該方剤リストの処方が薬局製剤以外であると判断されると、薬局製剤以外の方剤リストの処方と類似した薬局製剤に合致した方剤リストを生成する工程とを有するものである。

【0012】それにより、患者に最適な方剤が薬局製剤以外の方剤であっても、その方剤と類似した薬局製剤に合致した方剤リストを再生成するので、患者の症状に最適な薬局製剤に合致した方剤リストを生成することができる。

【0013】なお、本明細書に記載する薬局製剤とは、薬事法の規定において、医薬品の製造業の許可、いわゆる、医薬品製造免許を受けた製造所が厚生大臣の承認を受けて製造することのできる日本薬局方に収められた医薬品の品目を指すものとする。

【0014】さらに、本発明の漢方薬処方支援方法は、生成された前記方剤リストの生薬と患者が服用中の薬との照合を行い、副作用の恐れがある生薬を検出する工程と、検出された生薬を含む方剤を警告する工程とを有するものである。

【0015】それにより、患者が服用中の薬と副作用のある生薬が使用されるのを防止することができる。

【0016】また、本発明の漢方薬処方支援システムは、複数の特定の取次店に設けられ、各患者別のカルテデータを登録、更新または参照する複数のデータ入出力手段と、処方の支援を行う処方支援データが格納された第1の記憶部と、該データ入出力手段から入力されたカルテデータならびに該第1の記憶部に格納された処方支援データに基づいて患者の病状に有効な生薬リストを生成する第1の演算処理部と、当該第1の演算処理部により生成された生薬リストならびに第1の記憶部に格納された処方支援データに基づいて方剤リストを生成する第2の演算処理部と、当該第2の演算処理部によって生成された方剤リストならびにデータ入出力手段から入力されたカルテデータを格納する第2の記憶部とにより構成され、複数のデータ入出力手段とオンライン接続された処理手段と、当該処理手段により生成された方剤リストを表示または出力する出力手段とよりなるものである。

【0017】それにより、データ入出力手段により所定のフォーマットに従って患者のカルテデータを入力するだけで、処理手段がその患者の症状に最適な方剤リストを生成し、出力手段によって方剤リストを出力することができる。

【0018】さらに、本発明の漢方薬処方支援システムは、前記処理手段に、薬局製剤データが格納された第3の記憶部と、当該第3の記憶部に格納された薬局製剤データに基づいて、第2の演算処理部により生成された方剤リストが薬局製剤であるか否かを判断する第3の演算処理部と、当該第3の演算処理部によって薬局製剤以外

と判断された方剤リストを、第1の記憶部に格納された処方支援データに基づいて薬局製剤以外の方剤リストの処方と類似した薬局製剤の方剤リストに生成する第4の演算処理部とを設けたものである。

【0019】それにより、第3の演算処理部が、生成した方剤リストが薬局製剤以外であると判断すると、第4の演算処理部が、その方剤と類似した薬局製剤に合致した方剤リストを再生成するので、患者の症状に最適な薬局製剤に合致した方剤リストを生成することができる。

【0020】また、本発明の漢方薬処方支援システムは、前記処理手段に、生薬と副作用のある薬を検出する調剤忌避データが格納された第4の記憶部と、当該第4の記憶部に格納された調剤忌避データに基づいて生成された方剤リストの生薬と患者が服用中の薬との照合を行い、副作用の恐れがある生薬を検出する第5の演算処理部とを設けたものである。

【0021】それにより、第5の演算処理部が、患者の服用中の薬と方剤リストの生薬との照合を行い、副作用がある場合には、その生薬を警告するので、副作用の恐れのある生薬の使用を未然に防止することができる。

【0022】以上のことにより、複数の特定の取次店にデータ入出力手段を設けるだけで患者の症状に見合った方剤リストを生成することができるので、生薬の在庫や調剤機材などが不要となり、コストの負担を少なくでき、且つ調剤機材の設置場所も不要とすることができる。

【0023】また、処理手段が方剤リストを生成するので、深い専門的な知識がなくても、品質ならびに効果の安定した漢方薬を調剤することができる。

【0024】

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施の形態を図面に基づいて詳細に説明する。

【0025】図1は、本発明の一実施の形態による生薬処方支援システムの構成説明図、図2は、本発明の一実施の形態による生薬処方支援システムにおけるコンピュータのブロック説明図、図3本発明の一実施の形態によるカルテデータの一般症状の間診例を示す図、図4は、本発明の一実施の形態によるカルテデータの主要症状の間診例を示す図、図5は、本発明の一実施の形態によるカルテデータの舌診例を示す図、図6は、本発明の一実施の形態による症状結果データ出力例を示す図、図7は、本発明の一実施の形態による方剤リストの出力例を示す図、図8は、本発明の一実施の形態による生薬処方支援システムから出力される使用説明書の出力例を示す図、図9は、本発明の一実施の形態による生薬処方支援システムの動作を示すフローチャート図である。

【0026】本実施の形態において、漢方の生薬の処方支援や種々の医療情報などの記憶を行う漢方薬処方支援システム1は、患者の症状や薬歴などの様々なカルテデータが入力される端末機器（データ入出力手段）2が設

けられている。

【0027】また、漢方薬処方支援システム1には、該端末機器2に入力されたカルテデータに基づいて生薬の処方支援を行うコンピュータ（処理手段）3および該コンピュータ3とのデータ入出力などを行うパーソナルコンピュータなどの入力端末機器4が設けられている。

【0028】さらに、漢方薬処方支援システム1は、コンピュータ3から出力された種々のデータをプリントアウトやファックスなどによって出力するデータ出力機器5が設けられている。

【0029】そして、入力端末機器4およびデータ出力機器5によって出力手段が構成されている。

【0030】また、前述した端末機器2は、特定の契約した薬局や薬店などの取次店T1～Tn内の所定の設置個所に設けられており、コンピュータ3は、本社などの調剤センタCCに設置されている。

【0031】そして、それぞれの端末機器2とコンピュータ3とは、電話回線や専用回線などの通信回線6によりオンライン接続されている。

【0032】次に、コンピュータ3は、図2に示すように、方剤データ、生薬効能データ、薬剤忌避データならびに薬局製剤データなどが格納された方剤データ格納部（第1、第3、第4の記憶部）7が設けられている。

【0033】また、コンピュータ3には、中医学データや漢方文献データなどが格納された書籍データ格納部8が設けられている。

【0034】ここで、書籍データ格納部8は、たとえば、漢方書籍などの内容が格納されており、必要に応じて端末機器2によってコンピュータ3とアクセスし、閲覧したい情報を選択することにより、端末機器2の表示部などに表示が行われて閲覧できるようになっている。

【0035】さらに、コンピュータ3には、端末機器2によって出力された患者の症状、以前に服用していた薬あるいは副用中の薬の種類などの薬歴や処方データなどの患者に関する必要なデータであるカルテデータが格納されるカルテデータ格納部（第2の記憶部）9が設けられている。

【0036】また、コンピュータ3は、通信回線6のネットワーク管理および必要回線とのアクセスを行うサーバ10が設けられている。

【0037】さらに、コンピュータ3には、処方支援を行うために所定の演算処理ならびにコンピュータ3の全ての制御を司るホストコンピュータ（第1～第5の演算処理部）11が設けられ、サーバ10に接続されている。そして、ホストコンピュータ11には、前述した入力端末機器4が接続され、該入力端末機器4にはデータ出力機器5が接続されている。

【0038】次に、本発明の作用について、図1～図8ならびに図9に示すフローチャート図を用いて説明する。

【0039】たとえば、取次店T1に患者が訪れたとすると、取次店T1の薬剤師は、設置されている端末機器によってコンピュータ3とアクセスを行い、その患者の薬歴などの前述したカルテデータを入力する（ステップS101）。

【0040】このステップS101において、以前に来店しているなどの理由によりすでにカルテデータが作成されている場合は、端末機器2を操作することにより、そのカルテデータをコンピュータ3から呼び出すことになる。

【0041】次に、薬剤師は、図3に示すように、所定のフォーマットに従って患者に一般症状の問診を行い、その問診結果を端末機器2により選択し、入力を行う（ステップS102）。

【0042】その後、同様に、図4に示すような主要症状の問診を行い、その問診結果を端末機器2により選択し、入力を行う（S103）。

【0043】次に、薬剤師は舌の症状をみる、いわゆる、舌診を行い、図5に示すように、舌診の所見を同様に端末機器2により入力する（ステップS104）。

【0044】そして、端末機器2に入力されたこれらのデータは、サーバ10を介してカルテデータとしてコンピュータ3に出力されてカルテデータ格納部9に格納する（ステップS105）。

【0045】次に、ホストコンピュータ11は、方剤データ格納部7に格納された生薬効能データおよび前述したカルテデータに基づいて所定の処理を行い（ステップS106）、処理結果である症状結果データをカルテデータ格納部9に格納する（ステップS107）。

【0046】ここで、症状結果データは、図6に示すように、たとえば、主要症状の原因となっている患部の推定および推定した症状の解説などからなるものとする。

【0047】そして、カルテデータ格納部9に格納された症状結果データは、端末機器2ならびに入力端末機器4にも出力され、それぞれの表示部に表示が行われる（ステップS108）。

【0048】また、この症状結果データは、端末機器2または入力端末機器4を操作することにより任意のプリントアウトが可能となっている。

【0049】次に、薬剤師は、端末機器2を操作し、方剤処理のコマンドを選択する。

【0050】方剤処理のコマンドが選択されると、ホストコンピュータ11は、方剤データ格納部7に格納されている方剤データ、カルテデータ格納部9に格納されているステップS101～S104において入力されたカルテデータおよびステップS106において処理出力された症状結果データに基づいて、図7に示すように、複数の方剤候補を示す方剤リストの生成を行う（ステップS109）。

【0051】また、この時、ホストコンピュータ11

は、ステップS109において、生成された方剤リストに薬事法で定められた薬局製剤以外の方剤があるか否かの判断を方剤データ格納部7に格納された薬局製剤データに基づいて行い、薬局製剤以外の方剤がある場合には、方剤データ格納部7に格納された方剤データに基づいて、ホストコンピュータ11が、薬局製剤以外に類似した薬局製剤の方剤を再び生成して列挙し、表示を行うものとする。

【0052】その後、ホストコンピュータ11は、方剤データ格納部7に格納された副作用の恐れのある組合せの薬を検出する調剤忌避データに基づいて、ステップ101において入力された患者の服用中の薬とステップS109における方剤リストに使用される生薬と照合を行う(ステップS110)。

【0053】そして、方剤リストの内、患者が副用中の薬との間に副作用が伴う恐れのある生薬が存在する場合には、その生薬を検出する(ステップS111)。

【0054】次に、ホストコンピュータ11によって生成された方剤リストは、カルテデータ格納部9に格納され(ステップS112)、その後、端末機器2ならびに入力端末機器4に出力されてそれぞれの表示部に表示される(ステップS113)。

【0055】また、この時、ステップS111において、副作用の恐れがある生薬が検出されている場合は、たとえば、方剤リストの内、その生薬が含まれている方剤に所定のマークなどを付加して表示を行い、その処方を禁止する。

【0056】次に、薬剤師は、図7に示す方剤リストの内、最適な方剤を端末機器2または調剤センタCCに設置された入力端末機器4によって選択した後にカルテデータに間違いがないかの確認を行い(ステップS114)、間違いがなければ方剤リストを含んだカルテデータは、カルテデータ格納部7に格納され、データ出力機器5から方剤リストがプリントアウトされる(ステップS115)。

【0057】また、同時に、原料単価データに基づいて計算された処方する日数毎の漢方薬の売価表が端末機器2および入力端末機器4に表示部に表示され、データ出力機器5からプリントアウトされる。

【0058】その後、端末機器2および入力端末機器4に表示部には、図8に示すように、方剤される生薬の処方分量、処方日数、使用上の注意ならびに効能などが示された使用説明書と表示され、この使用説明書もデータ出力機器5からプリントアウトされる。

【0059】ここで、カルテデータ格納部7に格納される方剤リストは、生薬の方剤だけでなく、処方分量、処方日数、使用上の注意ならびに製造記録など方剤に係わる様々な情報が同時に含まれているものとする。

【0060】また、端末機器2を操作することによって方剤リストのプリントアウトを行うことができる。

【0061】そして、調剤センタCCの薬剤師が、データ出力機器5からプリントアウトされた方剤リストに基づいて生薬の処方を行い、前述した使用説明書を処方したパッケージなどに貼り付けた後に梱包を行い、取次店T1または患者の所在地に発送する。

【0062】それにより、本実施の形態では、各々の取次店T1～Tnにおける生薬の在庫を不要にできるので、各店舗に掛かるコストを大幅に削減することができる。

【0063】また、本実施の形態によれば、調剤機材も不要とできるので、各店舗に掛かるコストを大幅に削減でき、且つ調剤機材の設置場所を不要とすることができる。

【0064】以上、本発明者によってなされた発明を発明の実施の形態に基づき具体的に説明したが、本発明は前記実施の形態に限定されるものではなく、その要旨を逸脱しない範囲で種々変更可能であることはいうまでもない。

【0065】

【発明の効果】本願によって開示される発明のうち、代表的なものによって得られる効果を簡単に説明すれば、以下のとおりである。

【0066】(1)本発明によれば、所定のフォーマットに従って患者のカルテデータを入力するだけで、その患者の症状に見合った最適な方剤リストを生成することができる。

【0067】(2)また、本発明では、患者に最適な方剤が薬局製剤以外の方剤であっても、その方剤と類似した薬局製剤に合致した方剤リストを再生成するので、患者の症状に最適な薬局製剤に合致した方剤リストを生成することができる。

【0068】(3)さらに、本発明においては、患者が副用中の薬と副作用のある生薬が使用されるのを未然に防止することができる。

【0069】(4)また、本発明によれば、上記(1)～(3)により、各々の取次店に生薬の在庫、調剤機材ならびに調剤機材の設置場所などが不要となるので取次店のコストの負担を少なくでき、且つ深い専門的な知識がなくても、品質ならびに効果の安定した漢方薬を調剤することができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一実施の形態による漢方薬処方支援システムの構成説明図である。

【図2】本発明の一実施の形態による漢方薬処方支援システムにおけるコンピュータのブロック説明図である。

【図3】本発明の一実施の形態によるカルテデータの一般症状の問診例を示す図である。

【図4】本発明の一実施の形態によるカルテデータの主要症状の問診例を示す図である。

【図5】本発明の一実施の形態によるカルテデータの舌

診例を示す図である。

【図6】本発明の一実施の形態による症状結果データ出力例を示す図である。

【図7】本発明の一実施の形態による方剤リストの出力例を示す図である。

【図8】本発明の一実施の形態による生薬処方支援システムから出力される使用説明書の出力例を示す図である。

【図9】本発明の一実施の形態による生薬処方支援システムの動作を示すフローチャート図である。

【符号の説明】

1 漢方薬処方支援システム

* 2 端末機器（データ入出力手段）

3 コンピュータ（処理手段）

4 入力端末機器

5 データ出力機器

6 通信回線

7 方剤データ格納部（第1、第3、第4の記憶部）

8 書籍データ格納部

9 カルテデータ格納部（第2の記憶部）

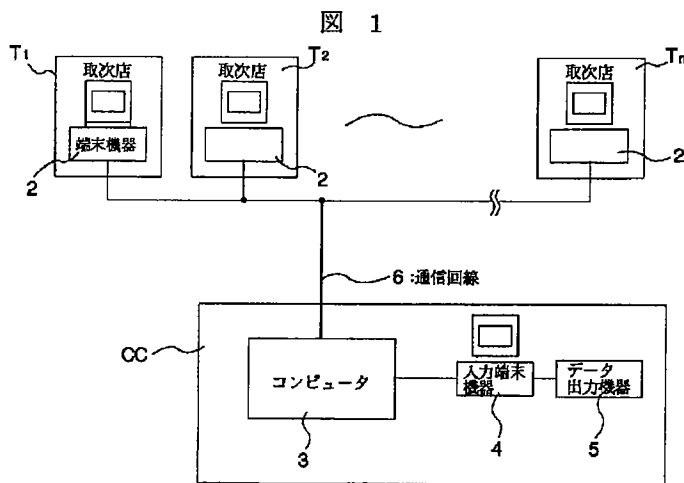
10 サーバ

11 ホストコンピュータ（第1～第5の演算処理部）

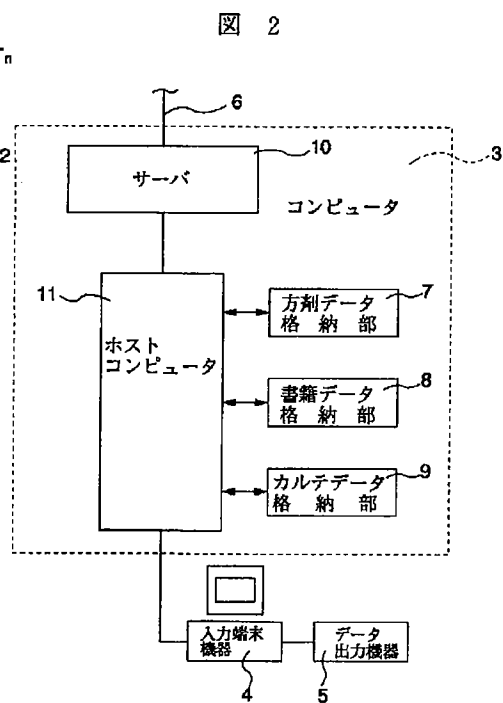
T1～Tn 取次店

* CC 調剤センタ

【図1】



【図2】



【図5】

図 5

****《舌診所見》****

1. 舌 色 : 淡紅舌
2. 苔 色 : 薄白苔
3. 苔 状 : 薄 苔
(潤・燥) : 正 常
4. 舌 形 : 正 常
(齒・裂) : 齒 痕
5. 血脈所見 : なし

【図7】

図 7

*****《推奨方剤》*****

《合方候補》

方 剤 名	適 応 証	適 応 主 要 症 状
芍薬調血飲 四物湯	血虚、血瘀 血虚、血瘀	血尿、残尿感、生理痛・不順 生理痛・不順
通導散 桃枝承気湯	血瘀、裏熱 血瘀、裏熱	残尿感、生理痛・不順 残尿感、生理痛・不順

【図3】

【図4】

図 3

図 4

患者番号 1	患者氏名	性別	年齢	一般症状
[頁 1/2]				
1.	湿度が高い日には症状が悪化する	17.	唇が白っぽい	
2.	体がほてりやすい	18.	生理が不順である	
3.	四肢や体が重だるい	19.	喉や胃がつかえた感じがする	
4.	疲れやすく持続力がない	20.	喉がはれて痛みやすい	
5.	ソクソクとさむけがしやすい	21.	よく目がかすんだり、寝れたりする	
6.	クーラーにあたるのがイヤである	22.	匂いあまりわからない	
7.	血管が浮き出ている	23.	顔や手足がむくみやすい	
8.	重い外傷や大手術をしたことがある	24.	頭が重く感じまいを起す事がある	
9.	寝つきが悪く、よく夢を見る	25.	髪の毛が抜けやすい	
10.	明け方に目が覚めてしまう	26.	話し声が小さいといわれる	
11.	朝起きにくく、寝ぼけやすい	27.	心臓や血管の病気がある	
12.	口臭がある	28.	血圧が高くなりやすい	
13.	口が苦く、胸やけする	29.	低血圧で立ちくらみしやすい	
14.	水っぽい鼻水やたんがでやすい	30.	動くとすぐ息切れがする	
15.	鼻水やたんが粘って色がつきやすい	31.	胸苦しいことがある	
16.	舌にできものができやすい	32.	水太りの傾向がある	

前へ戻る (患者データ入力)

次へ行く (主要症状入力)

一般症状を選択して下さい。

患者番号 1	患者氏名	性別	年齢	主要症状
[頁 1/2]				
【全身性】	14. 腰痛	【循環器系】	43. 口乾・口渇	
1. 発熱	15. 上肢痛	30. 高血圧	44. 嚥下困難	
2. 悪寒	16. 下肢痛	31. 低血圧	45. シャククリ	
3. 疲労・倦怠	17. 多発関節痛 (上)	32. うっ血	46. 悪心・嘔吐	
4. 痠疼	18. 多発関節痛 (下)	33. 貧血	47. 吐血	
5. 肥満	19. 多発関節痛 (全)	34. 出血性素因	48. 胃腸不快感	
6. 冷え症	20. 背部痛	35. リンパ節腫脹	49. 季節性・痛	
7. 上気	21. しびれ (上)	36. 動悸	50. 上腹部腫・痛	
【神経系】	22. しびれ (下)	37. 胸痛	51. 肝障害	
8. イライラ	23. しびれ (全)	38. 痔疾・脱肛	52. 胆石・胆嚢炎	
9. 不眠	24. 肩凝り	【上部消化器系】	【下部消化器系】	
10. 不安	25. けいれん	39. 食欲不振	53. 下腹部腫	
11. 抑鬱感	26. 抹消性麻痺 (上)	40. 黄疽	54. 下腹部腫	
12. 頭痛	27. 抹消性麻痺 (下)	41. 歯痛	55. 腹部膨張感	
13. 顔面痛 (顔通)	28. 抹消性麻痺 (全)	42. 口内炎	56. 腹水	
	29. 半身不随			

前へ戻る (一般症状入力)

次へ行く (舌診所見入力)

主要症状を選択して下さい。

【図6】

図 6

*** 《症状結果》 ***		*** 《症状グラフ》 ***	
<八綱気血水>			
順位	確信度	表寒	0
◆ 1: 血虚	66	表熱	0
◆ 2: 裏熱	64	裏寒	48
◆ 3: 血瘀	51	裏熱	64
4: 痰飲	49	血虚	66
5: 裏寒	48	血瘀	51
6: 氣滯	44	氣虚	38
7: 氣虚	38	氣滯	44
8: 津虚	12	津虚	12
9: 表寒	0	痰飲	49
10: 表熱	0		
<五臓>		心	38
順位	確信度	肺	0
◆ 1: 腎	70	脾	12
◆ 2: 肝	62	肝	62
3: 心	36	腎	70
4: 脾	12		
5: 肺	0		

***** 《基本証定義》 *****

《血虚》

血とは血中の諸成分を広く包含する概念である。従って血虚は貧血、循環機能の低下だけを指すのではなく、内分泌系や免疫系の機能の低下をも含む。一般に症状としては女性生理の不順や動悸、冷えなどが起こり易く、補血薬といわれる当帰、川芎、地黄などを用いた方剤が適応となる。

葛 根 湯

日 分
包入り
製造番号

成分及び分量 又は 本 質	日本薬局方 カ ッ コ ン マ オ フ シヨウキヨウ タ イ ソ フ ケ イ ヒ シャクヤク カ ン ソ フ 全 量 8.0g 4.0g 1.0g 4.0g 3.0g 3.0g 2.0g 25.0g
用法及び用量	本区1包を和紙袋入りのまま、水約500mlを加えて、半量 ぐらいたいで煎じつめ、和紙袋とともに煎じがすを除き、所 液を3回に分けて食前に服用する。上記は大人の1日量で ある。 15才未満7才以上 大人の $\frac{2}{3}$ 、7才未満4才以上 大人 の $\frac{1}{2}$ 、4才未満2才以上 大人の $\frac{1}{4}$ 、2才未満 大人の $\frac{1}{8}$ 以下を服用する。
効能又は効果	感冒、鼻かぜ、頭痛、肩こり、筋肉痛、手や肩の痛み

【使用上の注意】 1. 次の人は服用しないでください。 (1) 発熱不寒、悪心・嘔吐のある人。 (2) 発汗の著しい人。 2. 次の人は服用前に医師又は薬剤師にご相談ください (1) 本の虚脱症人。 (2) 胃の弱い人。 (3) 血圧の高い人又は低血圧。 (4) 心臓又は腎臓に障害のある人。 (5) むくみのある人。 (6) 今までに薬により、発疹・発赤、かゆみなどを起こしたことがある人。 (7) 妊婦又は妊娠していると思われる人。 (8) 医師の指導を受けている人。 3. 服用の際は、次のことにご注意ください (1) 定められた用法・用量を守ってください。 (2) 飲み方は、必ず1日分ずつ煎じ、お茶分をまとめて飲まないでください。 (3) 本剤は、必ず1日分ずつ煎じ、お茶分をまとめて飲むものと服用させてく (4) 本剤に服用させる場合には、保護者の指導監督のもとに服用させてく ださい。 (5) 本剤は、生後3カ月未満の乳児に服用させないでください。なお、生 後3カ月以上であつても、母乳未達の乳児には、止むを得ない場合には、 は、服用させないでください。 4. 服用中又は服用後は、次のことにご注意ください (1) 本剤の服用により、発熱、発熱不寒、悪心・嘔吐、発汗、発熱などの 症状があらわれた場合には、服用を中止し、医師又は薬剤師にご相談く ださい。 (2) 本剤を服用することにより、尿量が増える、腫れや手足がむくむ、ま だた力強くなる、手がこわくなる、血圧が高くなる、頭痛などの症状があ らわれた場合には、服用を中止し、医師又は薬剤師にご相談ください。 (3) 本剤の服用により、かかわった症状があらわれた場合には、服用を中止 し、速やかに医師又は薬剤師にご相談ください。 (4) 感冒、鼻かぜ、頭痛に服用する場合には、薬を服用しても症状の改善 がみられない場合には、服用を中止し、医師又は薬剤師にご相談くださ い。 (5) 肩こり、筋肉痛、手や肩の痛みなどに服用する場合には、1カ月位服用し ても症状の改善がみられない場合には、服用を中止し、医師又は薬剤師 にご相談ください。 (6) 長期服用する場合には、医師又は薬剤師にご相談ください。 5. 保存及び取扱い上の注意 (1) 子供の手のとどかぬ所に保管してください。 (2) 直射日光をさけ、なるべく湿気の少ない所に保管してください。 (3) 湿気をさけ、品質を保持するため、他の容器に入れかえないでくださ い。 (4) 開封後は湿気しやすいため、冷湿所又は冷蔵庫などに保管し、服用時 に再加熱して服用してください。

【図9】

図 9

